

高橋先生を悼む

文化学部長 木村英明

二〇〇〇年七月四日は、私にとって生涯忘れることのできない日となりました。その日は火曜日。講義もなく、普段であれば研究にいそしむことのできる貴重な日ですが、去る二一日に大学院文化学研究科（修士課程）の設置申請を済ませた直後で、次の面接審査の準備に朝から追われていました。机に向かつてほどなく、電話の呼び出し音が鳴り、想像だにできなかった悲しい知らせが飛び込んできました。私たちが敬愛する高橋康雄先生の奥様からの電話で、本日午前二時に先生が肝臓ガンのために亡くなられたという、訃報でした。打ちのめされるような激しい衝撃を受け、一瞬頭の中が真っ白になったことを今も記憶しています。途切れ途切れに、お悔やみの気持ちを伝えるのが精一杯でした。

先生の体が病魔に蝕まれていることは、前年秋の検診の際に判明したらしく、その直後、親しい仲間には先生の口から聞かされていました。しかし、手術せずに、自然食と減量による徹底した健康管理を行うことで必ずや治すと語る先生の揺るぎない意志を前に、少なくとも私は、それほど深刻なものとは受け止めていませんでした。さすが、酒を断ち、ともに過ごす機会がめっきり少なくなり、少々気になり始めて

いた頃、大学院の設置申請が文部省に受理されたことを報告しようという矢先のできごとでした。

あらためて紹介するまでもありませんが、文化学部は、一九九七年に札幌大学五番目の学部として発足しました。本年三月、初めての卒業生を世に送り出そうという若々しい学部です。高橋先生は、その当初から文化学部の一員として着任し、国内外で活躍する初代の学部長、山口昌男先生を助けつつ、学部長とかわらぬ学務を慣れない中で適切的確にこなしていました。ですから、二年後、山口先生が学長に選出された折に、名実ともに新学部長に就任したのは至極当然の成り行きでした。

新任の先生が、教授会の采配はもちろん、教学評議会や部長会など各種の会議を含むあらゆる学務（雑務）を難なく、しかも先入観にとらわれることなく公平にこなしていたことは、尊敬に値するものでした。何よりも、私が驚嘆するのは、大衆化する大学において、今日の大学人に求められる役割のすべてを人並み優れて果たしていた事実です。

初代学部長の発案による「北方文化フォーラム」・「土曜講座」は、市民への大学開放を目指し、著名で多彩な文化人や知識人を講師陣に迎えつつ行われる（毎週火曜日と土曜日）もので、文化学部の特色ある事業のひとつです。その企画、講師の人選と依頼、送り迎え、司会進行、手作り懇親会のホスト役などあらゆる役をほとんどひとりでこなしていました。頭の下がる思いでした。

もちろん、学生への教育も決して手を抜くことはありませんでした。実際には教育をないがしろにしていながら教育改革を論ずる偽善者が少なくない中で、不言実行、訪れる学生に等しく懇切丁寧な指導を行っ

ていたことは、周知の事実であります。最初で最後になりましたゼミ論集は、未完であると謙遜されていましたが、将来の大成を予感させるものでした。

さらに私が尊敬していたのは、学部長という激職にあつて、学務や教育のすべてに全力を傾け、しかも著書・論文など大変な研究業績をあげられていたことです。堰を切ったようにという表現がまさにぴったりのです。ここでは、そのひとつひとつを紹介することはできませんが、纏められた業績の数量は言うにおよびず、その扱う分野も、得意とする文学に限らず、メディア論、広告論など広く多岐にわたっています。大学改革を論議する中で、教育重視のあまり、教育が研究と並び立たぬような主張がしばしば見受けられます。また、今日の大学においてもはや研究は不用であると論ずる者すらもいます。ことの正否はともかく、高橋先生は、この議論の本質に、研究放棄を正当化しようとする試みがあるとして、深く憂えていました。良き研究者が良き教育者であるとは限りませんし、教育力が低下した今日の大学の中で良き教育者が求められているのも時代の流れと言えましようが、そのいずれに偏ることなくエネルギーのすべてを燃焼させて、私たち凡人に警鐘を鳴らしていたように思われるのです。

私たちは、これからの大学改革の範となるであろう大変な逸材を失ってしまったようです。

「弘毅寛厚、知人待士、蓋有高祖之風、英雄之器焉」と『蜀書』にありますが、日頃穏やかな振る舞いを常として、およそいさかいと無縁に思える先生を、戦国の乱世に生きる劉備や漢帝創始の英雄に例えることは、少々見当違いの感も否めませんが、広い見識と強い意志、しかも豊かな包容力をもち、これはい

う人物には甘んじてへりくだることができる人物とすれば、まさに似合いですし、やがて帝位につくほどの器であったと推察していました。その点においても、損失は計り知れません。

私事になりますが、北方文化フォーラムや懇親会を終えて、先生と二人が残り、酒を酌み交わす機会がいつしか多くなりました。そして、他人に責任を転嫁しない、愚痴を言わない生き方をモットーとする両者が、互いの経歴、組織やひととの交わり、昨今の研究課題、現状への不満などさまざまな事柄について愚痴をまじえながら語り合ったことは、少しばかり皮肉なことでした。高橋先生に心を許していただけのおかげであり、短いながらも充実したひと時でした。今は懐かしく、貴重な心の財産となっています。

ある時その先生が、自分の最終ゴールは、作家として認められることである、と語っていました。おそらくその目標に向かって遠大な計画をもっていたに違いありません。事実、残された資料やメモは膨大なものであります。志半ばでの死は、みずからも予想しなかったことであり、さぞ無念なことであったに相違ありません。柔らかな仏様のような最後の表情が、せめてもの救いでした。

文化学部の運営は、先生のごとく適切にはいきませんが、先生との一番大切な約束でありました大学院修士課程文学研究科の設置申請に続き、去る一月二七日には正式に文部省の認可を得ることができました。直接ご報告できないのがとても残念です。ようやく一人歩きをはじめました文化学部と文化学研究科ですが、今後の発展をお守り下さい。

先生、安らかにお眠り下さい。